様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５０４４１

研究課題名（和文）除雪を手がかりに、市民協働意識の再生をめざしたシティズンシップ教育プログラム

研究課題名（英文）Citizenship Education Program for Regeneration of Civil Collaboration: The Snow Removal Problem in Asahikawa

研究代表者
岡田　みゆき（Okada, Miyuki）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：９０３２５３０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,000,000円、（間接経費）　300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では旭川市が抱えている雪に関する問題を解決するために，授業開発を行った。その際，行政や地域と連携すること，児童が地域社会の一員として，自分にできることを考えることを授業に取り入れた。
その結果，除雪に関する知識を得，自分の今までの生活を振り返り，除雪作業員へ感謝の気持ちを抱くことができるようになった。また，除雪に関する問題を解決するために，将来大人になったとき,自分たちにできることを考えることができた。具体的には，ほとんどの児童が，自分の家だけではなく，近くの人や高齢者の雪かきを行ったり，除雪のマナーを守ったり，除雪の問題を他に伝える行動をとったりしようという意欲をもつことができた。

研究成果の概要（英文）：A new lesson plan is presented which encourages elementary school students to develop their citizenship. Three objectives of the study are identified: to work in cooperation with the city organization and neighborhood, to let the students think about what to do by themselves as citizens, and to develop their spirit of cooperation and their consideration for other people.
It was found that after completing the program, the students gained some knowledge of snow removal, looked back on how they lead their lives, and displayed gratitude to the snow removal workers. In addition, they thought about what to do by themselves as citizens, now and in the future, in order to improve the snow removal problem.
Thus, the students understood the situation on the part of the snow removal, and the importance to not only to leave city organization, but also to cooperate with city organization and the neighborhood to remove the snow in order to live a comfortable winter life.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学一般

キーワード：シティズンシップ　授業実践研究　除雪　小学校

1．研究開始当初の背景

(1)旭川市は、年間679cmの降雪量があり、除雪費は17億6390万円にものぼる。除雪費の削減は旭川市にとって重要な課題である。市は種々の広報活動を通して、除雪基準への理解、雪出防止、路上駐車防止等の啓発を行ってきたが、今だ、市民に浸透しているとは言い難い。官民協働の除雪意識を高め、除雪費削減を推進するためには、幼い頃から雪問題について関心を持たせ、安全で快適な街づくりへの意識を高めること、望ましい市民性を高めることが必要である。

(2) 除雪問題に対する教育プログラムは見受けられない。ただし、小学生向けに札幌市が作成した雪に関するマンガ、旭川市土木事業所が作成したビデオがある。これらは旭川市の重要課題である除雪問題に対する小学生のシティズンシップ教育プログラムを開発する上で、資料として使用できる。

2．研究の目的

(1)旭川市が抱えている雪に関する問題を解決するために、行政や地域と連携し、児童が地域社会の一員として、自分にできることを考え、他者との助け合いや思いやりの気持ちを育む授業開発を行い実践する。

(2)実践した教育プログラムの反省点を明らかにした上で、プログラムに修正を加える。そして、修正プログラムが修正前プログラムよりも児童の市民性を培ったかを明らかにする。

3．研究の方法

(1)授業対象・実施期間

修正前は北海道の国立大学法人附属小学校の5年生2クラス、76名(男子38名、女子 38 名）を対象に行った。授業の実施期間は2011年1月で、授業時数は全2時間であった。修正後は北海道旭川市立Ｋ小学校の6年生2クラス、57名(男子30名、女子 27 名）を対象に行った。授業の実施期間は2013年1月下旬~2月上旬で、授業時数は全4時間（体験活動2時間を含む）であり、家庭科の授業として行った。

なお、土木事業所の職員の方をゲストティーチャーとして，また体験活動では大学生をボランティアとして迎え、授業を行った。

(2)分析方法

授業の1時間目と2時間目で用いたワークプリント2枚と授業後の感想文から授業の効果を検討した。なお、児童の記述についてはカテゴリーに分け、記述した児童の数をカウントし、修正前と修正後のプログラムについて比較している。

4．研究成果

(1)プログラムの反省点

前回のプログラムの１時間目では、次の点が反省点として挙げられる。子どもたちは除雪の経験はあるものの、旭川の除雪課題に対して全く知識がなかった。そのため、ＤＶＤを一度見ても、課題を見つけることが難しい児童も多かった。また、除雪課題と事業所の職員の方(ゲストティーチャー）が市民にお願いしている除雪のマナーとを混乱して理解していた。導入に時間がかかり、本時のまとめである「授業で学んだこと」を発表することができなかった。

2時間目では、自分たちにできることが自宅周辺の除雪とＤＶＤに出てくる内容しか考えられなかった。多くの児童は除雪課題に対して理解はしたが、自分の問題として捉えることができなかった。そのために、学んだことを実際の日常生活に生かすことができなかった。

(2)授業の目標

①家族や地域社会の一員としての自覚をもち、旭川の除雪の問題に関心を持つ。【関心・意欲・態度】

②旭川の除雪の問題を解決するための手立てを工夫して考え、自ら行動しようとする。【生活の創意工夫】

③快適な冬の生活を送るために、学校生活や家庭生活において実践することができる。【生活の技能】

④旭川の除雪の問題を理解し、快適な冬の生活を送るためには市民として行動することの大切さを理解する。【生活の知識・理解】

(3)修正後のプログラム

修正前プログラムでは、ＤＶＤの内容を理解することが難しかった児童がいたことから、授業対象者を6年生に変更した。

1時間目の導入では、除雪の課題に関心を持ってもらうため、導入の時間を短縮するために、本時の課題に直接関係する内容であり、修正前のプログラムで最も子どもが興味を示した除排雪費を提示した。また、子どもたちには除雪課題に対して知識がないことから、ＤＶＤを見る前に、ゲストテ

ィーチャーに旭川の除雪課題をいくつか挙げてもらった。つまり、イメージを持ってＤＶＤを視聴し、その中で除雪課題を確認できるようにした。また、ワークプリントに「除雪に関する問題」と「除雪のマナー」という 2 項目を立て、ＤＶＤの内容を分けてメモできるようにした。さらに、ゲストティーチャーから、除雪に関する苦情件数を表に示したものを提示しながら、苦情が多いことや、市民にお願いしていることを話してもらい、除雪課題が市の大きな問題として実感できるようにした。

2 時間目は、家庭→学校→地域と徐々に視野を広げて、除雪課題を解決するために自分ができることを考えられるようにした。また、家庭や学校でできることは個人で考えさせたが、地域でできることを考えることは難しいので、グループで考えさせた。さらに、考えた活動を行動に移す意欲を持たせるために、クラスメイトに高齢者宅で除雪作業を行った経験を話してもらった。

3,4 時間目には、除雪の大変さや地域のために何かをする喜びを実感したり、考えたことを行動に移すことで地域をよりよくしようという意欲を持たせたりするために、除雪活動を取り入れた。

子どもたちが自分たちでできることとして取り上げた校区の中の公共の場所（消火栓、ごみステーションなど）を大学生とグループを作り、協力して除雪した。

(4)ワークプリントの分析

①自分が実行したいこと

2 時間目の授業のまとめでワークプリントに記入した「自分でやってみようと思うこと」の具体例からカテゴリーを形成し、記述した児童の数をカウントした。

修正前は自宅の周辺でできること（修正前 32、修正後 25）を記入している児童が多かったが、修正後は公共の場所（修正前 23、修正後 55）を除雪すると記入した児童が増えた。子どもたちの視点が地域に広がったことがわかる。また、地域でできることを、グループで考えさせたことから、できる内容の数（修正前 2 種類、修正後 5 種類）も多くなった。

また、除雪のマナーに関する記述（修正前 19、修正後 27）が多くなり、マナーへの意識が高くなったことがわかる。これは、ワークプリントに「除雪のマナー」という項目を立て、ＤＶＤの内容をより深く視聴できるようにしたことや、ゲストティーチャーから、市民にお願いしていることとして除雪のマナーについて話してもらったこと、さらには 2 時間目の導入で除雪のマナーに関する振り返りを行ったことによるものだと思われる。

児童が記述した数が、全体を通して、修正後の方が多かった（修正前 86、修正後 115）。修正後の方が授業の対象者の人数は少なかったにも関わらず、授業を 6 年生で行ったことにより、除雪に関する理解が深まり、課題を解決する方策を多く考えることができたと思われる。

②授業全体に関する感想

修正前、修正後プログラムの授業終了後に書いてもらった児童の感想をカテゴリーに分け、記述した児童の数をカウントした。知識の獲得の項目では、プログラムの修正後，除雪に対する苦情について記述した児童は減ったが（修正前 18、修正後 3）、「どのような状況の時（雪の量、道の幅）に除雪車が入るかわかった」などの除雪作業（修正前 15、修正後 40）や、「ごみの出し方が除雪に関係していることを知った」などの除雪のマナー（修正前 11、修正後 22）について記述した児童が増えた。また、「除雪について、たくさんのことを学んだ」など、除雪全体についての記述（修正前 0、修正後 21）が非常に増えた。修正後、除雪に対する理解が深まったことがわかる。

相手の立場の理解と除雪への思いの項目では、修正前は、「除雪作業は大変だ」というように除雪作業（修正前 32、修正後 22）や除雪作業員（修正前 26、修正後 5）についての記述が多かった。しかし修正後は、自分が除雪活動を通して感じたことを記述した児童が多かった（修正前 0、修正後 50）。特に、「地域の人から、ありがとうと言われてすごくうれしかった」、「大学生と一緒に除雪したら、除雪のイメージが変わった。楽しかった」など、地域のために何かをする喜びを実感した記述が目立った。

日常生活における実践への意欲の項目では、修正後、「みんなが使う公共の場所はみんなで除雪しよう」など公共の場所の除雪活動についての記述（修正前 0、修正後 21）や、「自分もみんなも除雪のマナーを守るべきだと思う」など除雪マナーの遵守（修正前 12、修正後 30）についての記述が多くなった。また、「今から、積極的に雪掻きし、みんなが暮らしやすい地域にしたい」（17）、「除雪活動をして、自分たちに

もできることがあると感じた」（3）など、修正後、自分も市民の一人であるという意識が高まったことが感じられる記述も見られた。

全体を通して、児童が記述した数が，修正後（332）の方が修正前（186）よりも 1.8 倍多かった。また、どの項目においても、修正後の方が多いことがわかる。やはり授業の対象者を 6 年生にしたこと、除雪活動を取り入れたことで、子どもたちが旭川の除雪について感じることが多くなり，記述量が増したと思われる。

③児童の除雪に対する考えの視点の変化

1 時間目と 2 時間目に使用したワークプリント 2 枚と授業後の感想文の記述から、児童の除雪に対する考えの視点がどのように変化しているかを示した。なお、除雪活動も含めた全 4 時間の修正プログラムの授業をすべて受けた児童 45 人を対象としている。

1 時間目の授業では、多くの児童が「道路に雪を出してはいけない」、「路上駐車は迷惑だ」など除雪のマナーの記述や「排雪をするのにお金がかかる」、「除雪は夜間の作業で大変」など除雪への理解を示す内容がほとんどであった。

「家の除雪をお手伝いする」など自分の役割や、「地域で協力して除雪をやるべきである」など地域社会に視点を持った記述はほとんど見られなかった。しかし、2 時間目の授業や 3,4 時間目の除雪活動を通して、地域や社会に視点が広がったり、自分の問題として考えを深めたりしていることがわかる。

最も多かった視点の変化は、除雪への理解→コミュニティとの関わり→コミュニティの関わりで 13 人であった。最初は「除雪のマナーがわかった」など除雪への理解を示す記述から、2 時間目には「高齢者の家の除雪を手伝う」と自分の地域に視点が変化するが，全ての授業が終わった後でも「みんなが歩く道路を通りやすく除雪する」と自分の地域のまま視点が変わらない児童が最も多かった。

次に多かったのは、除雪への理解→コミュニティとの関わり→よりよい地域社会の実現で 6 人であった。上記の除雪への理解→コミュニティとの関わり→コミュニティの関わりと 2 時間目までは同じ経過を示すが、最終的には「除雪ボランティアをみんなのためにしたい」など、旭川市全体に視点が及んでいる。市民性が培われたことが理解できる。

このように、コミュニティに視点を広げた児童は 47%、社会に視点を広げた児童は 22%、両方の視点が持てた児童は 16%と、80%以上の児童が地域や社会のへの視点を持つことができた。

この他、除雪への理解→コミュニティとの関わり→自分の役割や、除雪への理解→よりよい地域社会の実現→自分の役割のように、2 時間目で視点は広がるが、最後は「自分にできることをやる」というように自分の役割に戻る思考の経過もある。これは除雪の問題を自分の問題として捉え、自分に何ができるかを考えている児童で、思考を深めたと思われる。

以上、2 時間目の授業で、家庭→学校→地域と徐々に視野を広げて、除雪課題を解決するために自分ができることを考えさせたことや、3,4 時間目に、地域のために何かをする喜びを実感させたり、地域をよりよくしようという意欲を持たせたりするために、除雪活動を取り入れたことで、児童の市民性が培われたことがわかる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①岡田　みゆき、土岐　圭佑、小学生のためのシティズンシップ教育プログラム－旭川の除雪課題を通して－、北海道教育大学紀要（教育科学編）、査読無、64(2)、2014、119－127

②土岐　圭佑、小学校家庭科におけるシティズンシップを育成するための授業実践－旭川市の除雪課題を通して－、日本家庭科教育学会誌、査読有、55(1)、2012、53－58

〔学会発表〕（計 3 件）

①岡田みゆき、土岐圭佑、小学校家庭科におけるシティズンシップ教育‐地域のための除雪活動を通して－、日本家庭科教育学会、2013 年 6 月 29 日、弘前大学教育学部

② Miyuki Okada 、 Keisuke Doki 、 Citizenship Education Program for Elementary School Pupils: The Snow Removal Problem in Asahikawa、10th Annual Hawaii International

Conference on Education、2012 年 1 月 7 日、in Honolulu Hawaii USA

③土岐　圭佑、岡田　みゆき、小学校家庭科におけるシティズンシップを育成するための授業実践‐旭川市の除雪課題を通して－、日本家庭科教育学会、2011 年 6 月 26 日、長崎大学教育学部

6．研究組織

(1)研究代表者

岡田　みゆき（OKADA，Miyuki）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：９０３２５３０８

(2)研究協力者

土岐　圭佑（DOKI，Keisuke）
鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷小学校教諭